

教宣 せぶん

沖縄レポート

本部主催の沖縄会場での春闘オルグに同行してきました。同行の目的は、07春闘のたたかいの柱のひとつにも位置づけられている私たち日勤外勤のたたかいについて、沖縄の組合員に当事者の生の声を訴えてくることでした。

「全損保をあげた支援をうける中で、私たちの外勤社員としての地位確認を求める裁判は1月12日に結審し、3月26日に判決が下されることになりました。勝利判決を見通せる段階までになっていると思います。しかし、勝利判決が出されたからと言って、この問題が解決するとは思っていません。勝利判決を手に、さらにどれだけこの問題の本質や経営の横暴さを、私たちが世論に訴えることができるか、世論を巻き起こす運動が展開できるかに、この問題の解決がかかっていると思っています。そんな趣旨から、今回、沖縄の地に同行させてもらいました」と挨拶しました。与えられた時間はそれほど長くはありませんでしたが、

裁判のなかで、会社が社員制度の廃止を決めた理由を説明する場面があった。わずかに数パーセント増収することを「飛躍的増収」とたとえ、社員部門ではそれは難しいと会社は言った。しかし、こちらの反対尋問で、継続雇用の道を選び、パートナーズ代理店の使用人として雇用された場合、現状の賃金を確保するためには倍の増収が必要になることが明らかにされ、それは「可能なのですか？」の追求に、会社側証人は平然と「可能です」と答えた。傍聴席からは大きな失笑が巻き起こり、会社論理の大いなる矛盾と横暴さが暴露された。

すべての裁判を傍聴してきた者として、肌で感じたものがある。それは私たちと会社のこの裁判にかけている熱意・執念の差だ。会社のこの裁判にかける姿勢は、事務的であり、業務の一環というべきものであり、まさに官僚的だ。かたや私たちは弁護団の先生方の献身的な支えのもと、絶対負けられないというトーナメントをたたかっている意識で臨んでいる。傾けているエネルギーもまったく違う。このモチベーションと流している汗の量の違いは、勝負の世界では決定的になると感じる。

自分たちの生活も懸かっているし、人生を賭けたたたかいでもある。それとともに、損保業界で働いているもの、日本で働くもののためのたたかいという意識ももっている。

と、訴えてきました。沖縄の組合員の方も

漠然としたイメージだったが、日勤外勤のたたかいがはっきりわかった。

正直言って、他人事だと思っていたが、この沖縄の地で、当事者から生の話を聞かされて、頑張るって欲しいと思ったし、影ながら応援したい。

自分が所属する ACE 支部でも、同じような雇用問題の裁判があり、全損保の全面

的な支援があって勝利することができた。絶対に勝利できると思うし、がんばって
もらいたいと思う。生の声を聞いてよかった。
と言って頂き、早速、那覇郵便局消印の裁判所への要請ハガキを書いてもらいました。

その後に行なわれた懇親会では、友好労組である大同火災海上労働組合の組合員の
方も多数参加され、交流をはかるとともに、私たちのたたかいについて現状を訴えて
きました。

判決日を1カ月後に控えた私たちのたたかいは、これからまさに正念場を迎えよう
としています。スト権も確立されています。厳しいたたかいが予想されますが、遠く
沖縄の地からこのたたかいを応援してくれる仲間がいることも心に留めて、意気高く、
果敢に、最後までたたかいぬく決意を新たに、沖縄レポートとします。